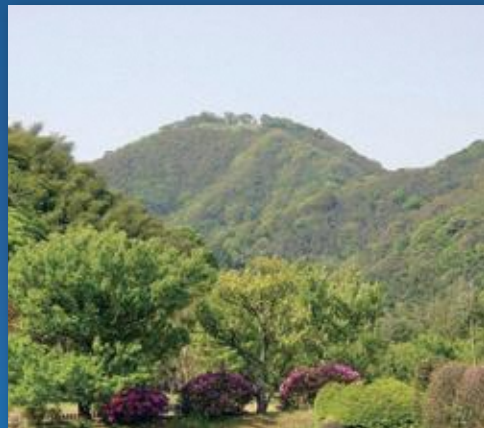
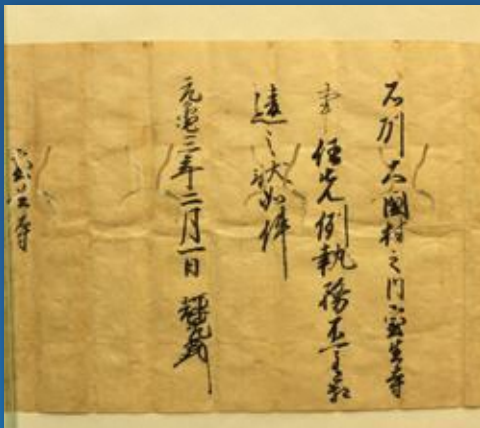


まぼろしの古刺 保国山金皇寺の中世文書から読み解く

戦国大名毛利氏と 石見銀山



保国山金皇寺の概要

金皇寺は、大田市仁摩町大国にある浄土宗の寺院です。山号は保国山と呼びます。金皇寺に伝わる由緒によれば、もとは大国村冠かむりに所在し、鳥羽山光明寺と呼ばれていました。その後、元亀元（1570）年に石見銀山の極楽寺住職・良休りょうきゅうによって現在地へ移転、金皇寺として再興されたとされています。このように、戦国時代にさかのぼる古い歴史を持つ金皇寺ですが、どのような歴史を持つ寺院なのか、こ

れまで詳しく分かっていませんでした。

令和2（2020）年、石見銀山遺跡に関する調査を実施したところ、偶然にも古文書をはじめとした文化財の数々を発見することになりました。金皇寺から見つかった文化財は古文書、棟札、扁額など約300点（現在は大田市教育委員会蔵）。今回は、金皇寺が守り伝えてきた文化財から見えてくる石見銀山の隠れた歴史を探ります。

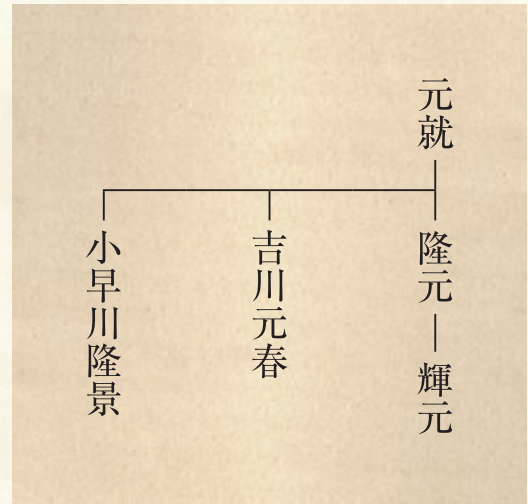
金皇寺の中世文書 ～戦国武将たちと金皇寺～

金皇寺が守り伝えてきた文化財の中で特に貴重なものは中世文書（全部で5点）です。石見銀山周辺において戦国時代の古文書がまとまって発見される事例はそう多くありません。しかも今回見つかった古文書は今まで十分に存在が知られていなかった新出史料でした。金皇寺文書の希少的価値をさらに高める史料と言えます。

大永7（1527）年に発見されたとされる石見銀山。大内氏が支配した時期を経て、毛利氏と尼子氏による争奪戦が繰り返されました。永禄5（1562）年、争奪戦に勝利した毛利元就が石見銀山を掌握すると、慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いまで毛利氏が支配しました。今回見つかった金皇寺の中世文書は毛利氏が石見銀山を支配した時期に出されたものです。

元龜2（1571）年、毛利元就が死去すると、石見銀山支配は毛利輝元に引き継がれました。また、金皇寺のある大国村は吉川元春の所領となっていたようです。金皇寺の初代住職・良休は毛利氏や吉川氏

と親しい人物でした。良休は自身の持つパイプをもとに毛利氏らの保護を受け、戦国の世の中でも金皇寺が存続できるように奔走していたのです。これまで石見銀山周辺の寺院と毛利氏らの関係はあまりよく分かっていませんでした。金皇寺文書は、石見銀山の戦国時代史を探る上で貴重な手がかりといえます。



毛利氏略系図

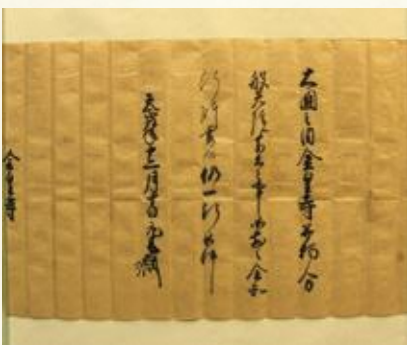
[1] 毛利輝元安堵状



石州大国村之内宝生寺
事、任先例執務不可有相
違之状如件、
元龜三年二月一日 輝元（花押）
宝生寺

元龜3（1572）年、石見銀山を支配していた戦国大名・毛利輝元がこれまで通り宝生寺を保護することを認めた安堵状です。宛先の「宝生寺」は、金皇寺の末寺（配下の寺院）に当たる寺院ですが、現存しません。この文書が出された前年、輝元の祖父・毛利元就が死去しています。新たに当主となった輝元は、祖父の頃と変わらない保護を約束するために、石見銀山周辺の寺社に安堵状を出したと思われます。

[2] 吉川元春安堵状



大国之内金皇寺并拘分
般若院分等之事、如前々全知
行肝要候、仍一行如件、
天正九年十二月十日 元春（花押）
金皇寺

天正9（1581）年当時、金皇寺のある大国村は吉川元春が領主でした。この文書は、吉川氏が金皇寺の持つ土地の保護を認めた安堵状です。当時、織田信長と毛利輝元の争いが激しくなっており、元春も鳥取方面に出陣していました。不穏な情勢を受けた元春は、自らの所領にある寺院を保護することで足場を固めようとする思惑があったのかもしれない。なお、金皇寺の記録によれば、寺領の保護に感謝した金皇寺は元春を崇敬していたようです。

[3] 吉川氏奉行人連署打渡状



打渡 大国内金皇寺領
 一田式町三段半 分米拾五石四斗四升
 一田三段 分米石七斗
 以上田數式町六段半、分米拾七石壹斗四升
 右打渡如件、
 天正九年十二月十日
 但馬守 (花押)
 木工允 (花押)
 因幡守 (花押)
 金皇寺

天正9 (1581) 年12月、吉川元春の安堵状を受けて、吉川氏の家臣3名が連名で出した打渡状です。「連署」とは連名でサインすることです。「打渡状」とは、土地の引き渡しの際に出された文書のことです。吉川元春による安堵の具体的な内容が記されています。これによれば、元春が認めた金皇寺の土地の面積が2町6段半、石高が17石1斗4升であることが分かります。

[4] 南湘院打渡状



打渡
 田三段半 米三石式斗 金皇寺
 田壹段 米壹石壹斗五升 同寺
 島壹段半 代六百五拾文 同寺
 以上五石 代方共
 屋敷 壹ヶ所 善石衛門
 以上
 右之前打渡所如件、
 文禄四年正月六日 南湘院 (花押)
 金皇寺

毛利氏の銀山代官・南湘院が出した打渡状です。文禄年間 (1592~96) になると、吉川氏に代わって毛利氏が大田村を支配していました。大田村のような銀山周辺の村々を銀山代官が支配するようになったのは、毛利氏の石見銀山支配が強化されたためです。天正20 (1592) 年、豊臣秀吉が朝鮮出兵を開始し、毛利氏は銀山支配を強化することで朝鮮出兵に伴う軍事費負担に対応する思惑がありました。この文書からは、毛利氏の石見銀山支配の変化を知ることができるのです。

[5] 綿貫主税助年貢請取状



納 大田村金皇寺年具之事
 合四石三斗六升七合四勺定
 外二五斗四升五合九勺、但右之手数
 筈延米共、但右二壹斗式升五合宛
 額外二壹斗三升壹合壹勺三勺、
 但右三升宛ノ□□請取申所如件、
 慶長五十二年二月廿六日 綿貫主税助 (花押) (黒印)
 金皇寺 参
 ※判読できない箇所は一文字につき□で表しています。

毛利氏家臣の綿貫主税助が金皇寺から納められた年貢を受け取った際に出した文書 (領収書) です。この文書が出された慶長5 (1600) 年12月は既に関ヶ原の戦い (9月) が終わっている時期です。関ヶ原の戦い後に石見銀山は徳川家康の支配下に置かれますが、なぜ毛利氏の家臣が活動していたのかは謎です。実のところ、毛利氏から徳川氏に支配が引き継がれた過程は不明なことが多く、[5]の年号が追筆の可能性も考えられます。綿貫氏の素性を含めてさらなる研究が必要です。

コラム

注目! 戦国武将の花押



文書を見ると、年月日の下に作成者の名前と一緒に花押と呼ばれるサインが据えられています。漢字や動物、凶形などの形からデザインされており、個人によって花押の形はそれぞれ異なります。中には一生のうちに何回も花押の形を変える人も存在しました。綿貫主税助は花押と黒印の両方を使っていますが、戦国時代後半になると印章を代わりに使う事例が増えていきました。なお、現在でも内閣の閣僚は公文書に花押を使用することがあります。

へんがく
扁額の裏側には…

長い石段を登り、山門をくぐると、金皇寺の本堂があります。本堂に入ると正面には金皇寺の山号である「保国山」と書かれた大きな扁額が掛けられていました。

この扁額の裏側には、明治26年（1893）8月に前内務大臣の品川弥二郎が大国村の篤農家・安井好尚の屋敷で揮毫したと墨書されています。品川弥二郎は、幕末に松下村塾で学び、尊王攘夷運動に奔走、明治維新後はドイツ駐在日本公使や内務大臣などをつとめた人物です。

当時の新聞にも、品川弥二郎が先祖ゆかりの地を訪ねる途中、明治26年8月15日から17日まで大森大国を訪れたという記事が載っています。この時依頼に応じて筆をとったのではないのでしょうか。



金皇寺の扁額



金皇寺扁額の裏側



品川弥二郎肖像
(国立国会図書館ウェブサイトより転載)

戦国時代の金皇寺と石見銀山の略年表

西 暦	和 暦	主な出来事
1527年	大永7年	博多の商人・神屋寿禎、石見銀山を発見する。
1556~1562年	弘治2~永禄5年	毛利氏と尼子氏が互いに石見銀山の争奪戦を展開する。
1562年	永禄5年	毛利氏、石見銀山を掌握する。以後、約40年間にわたって石見銀山を支配する。
1570年	元亀元年	石見銀山の極楽寺住職・良休、迦摩郡大国村に金皇寺を創建する。
1571年	元亀2年	毛利元就、死去する（6月）。
1572年	元亀3年	新たに当主となった毛利輝元、宝生寺（金皇寺末寺）など石見銀山周辺の寺社へ安堵状を出す（正月）〔1〕。
1581年	天正9年	織田信長と毛利輝元の争いが激化する。豊臣秀吉に包囲された鳥取城が開城する（10月）。
		吉川元春、金皇寺に安堵状を出す（12月）〔2〕〔3〕。
1582年	天正10年	本能寺の変で織田信長が討たれる（6月）。
1588年	天正16年	金皇寺初代住職・良休、死去する。
1592年	天正20年	豊臣秀吉、朝鮮出兵をはじめ。毛利氏も従軍する。
1594年	文禄3年	この頃、毛利氏の石見銀山奉行に佐世元嘉が就任。毛利氏、石見銀山の寺社領を改めて設定する「銀山御改」を実施する。以後、銀山周辺の寺社も打渡状が出される。
1595年	文禄4年	毛利氏の銀山代官・南湘院、金皇寺の寺領を5石とする打渡状を出す（正月）〔4〕。
1600年	慶長5年	関ヶ原の戦いで徳川家康勝利（9月）。石見銀山は毛利氏から徳川氏へ支配者が交代する。
		毛利氏家臣・綿貫主税助、金皇寺に対して年貢請取状を出す（12月）〔5〕。